

富岡鉄齋と洞天福地

大形徹

はじめに

注1…村越英明「開館30周年 鐵齋—仙境への道—」鐵齋美術館、2005年、『鐵齋：仙境への道：富岡鐵齋没後90年』鐵齋美術館、2014年、92。

富岡鐵齋(1837～1924)には「洞天福地 群僊集會」と題した仙境圖があり、「群僊集會圖」*¹と名付けられている。

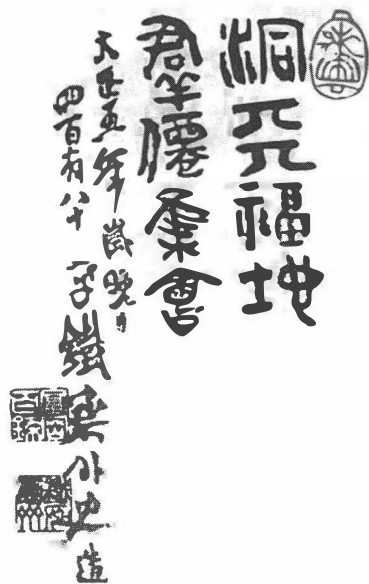
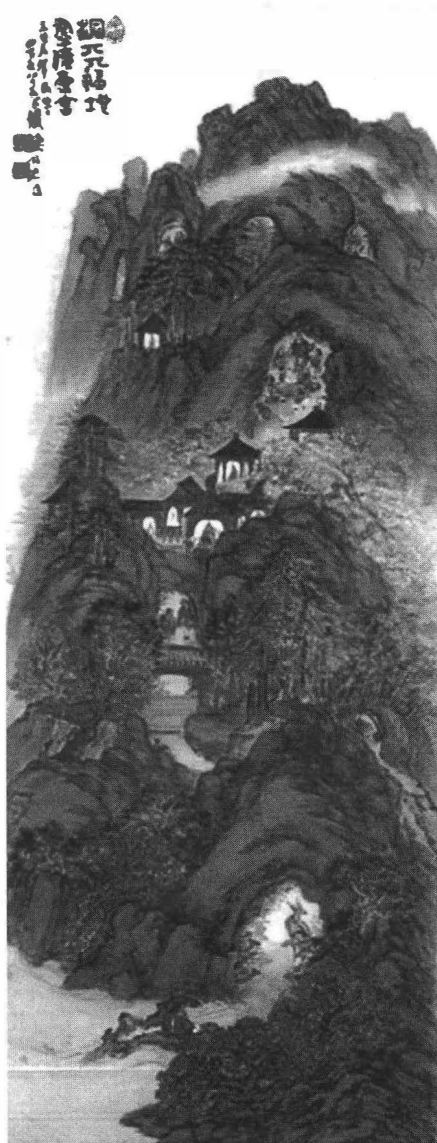


圖 01、02

その賛には、篆書で二行にわたり、「洞天福地 羣僊集會」の八文字が記されている。鐵齋81歳の作である。作品解説では、「賛の「洞天福地 羣僊集會」は、「神仙の住んでいる地で、多くの仙人たちが集会する」の意」と簡単に紹介されている²。

「洞天福地」は、唐・司馬承禎(639～735)の『天地宮府圖』に十大洞天・三十六小洞天・七十二福地とあることによる³。宋・張君房撰『雲笈七籤』(1017～1021頃成立)巻二十七「洞天福地」は『天地宮府圖』を収録している。その「十大洞天」は、「太上曰く「十大洞天は、天地名山の間に處る、是れ上天の羣仙に遣わし統治せしむるの所」⁴から始まっており、鐵齋はまさに、その部分を摘録しているのである。鐵齋は「瀛洲仙境圖」⁵の箱書きで、「大正十二年七月。據雲笈七籤作此 並題簽於魁星閣。八十有八叟鐵齋外史」と記している。『雲笈七籤』に拠って作ったと書いているのである。

中国や日本の多くの神仙道教の圖のなかで、たんに「洞天」と記すもの、また洞天関係の山の名を記すものはあるが、洞天福地の賛をもつものは、鐵齋のこの一幅だけではないだろうか。

圖を見るに最上部に小さな洞窟が四箇所、うち二つに人が描かれ、その下に大きめの洞窟が描かれ、多数の人物が描かれている。まん中にも人が描かれる洞窟があり、その右下に小さな洞窟、また手前には大きな洞窟があり、そこに鹿が入ろうとしている。鹿は鐵齋の他の洞窟にも描かれている。

傳五代・董源(10世紀前半)「洞天山堂」、明・陸治(1496～1576)「仙山玉洞」、明・仇英(1497～1552頃)の「玉洞仙源圖」、明・張宏(?～?)「林屋洞」等が、題などに「洞」、「洞天」のつくものである。

明・汪珂玉(1587～?)撰『珊瑚網』巻三十五には「洞天清曉圖」という圖が記されている。圖は残っていないと思われるが、賛がある⁶。「霧閣雲窓縹緲間、丹崖玉樹絕躋扳、桃源咫尺無人識、海上徐生漫往還」「何人結屋雲泉間」「結廬萬山深處也」「樓閣」といった句が見え、建物が描かれていたことがわかる。

日本では、雪舟(1420～1506)の「山水長卷」にも洞門が描かれるが、すぐに屋根のある橋につながっている。鐵齋の「餐水喫霞圖」にも似たものが描かれ、その影響を受けている可能性がある。

拙稿では富岡鐵齋の「群僊集會圖」を中心に、洞天福地の語をキーワードとして、鐵齋の仙境圖の特色を明らかにしたい。

小高根太郎は、「鐵齋は「わしの絵を見るなら、まず賛を読んできれ。」と、しばしば、人に語っているが、彼は絵が出来てから賛を考えたのではなく、まず賛が先に頭に浮んで、それに相応しい絵を考えたように思われる」と述べている⁷。数ある鐵齋関係の書籍のなかで、賛に拘るのは小高根ぐらいであろう。彼は「鐵齋研究」全72巻の賛をすべて訓読し⁸、大意をつけ、その典拠とな

注2…同上、作品解説、251頁。なお、この圖は鐵齋研究所の『鐵齋研究』には収録されていない。同名の「群僊集會圖」は、3号に収録されるが、異なる圖である。

注3…後蜀・杜光庭(850～933)も『洞天福地岳瀆名山記』を著している。

注4…太上曰、十大洞天者、處天地名山之間、是上天遣羣仙統治之所。

注5…『鐵齋研究』1983年、第65号、19。

注6…明の黃鶴山樵、王蒙(1306～1385年)の賛には「霧閣雲窓縹緲間、丹崖玉樹絶躋扳、桃源咫尺無人識、海上徐生漫往還」とあり、桃源郷や徐福のことが記されている。他に河東張翥、金溪金霖、壺中、筠菴等の賛がある。

注7…『画聖鐵齋名作展』(鐵齋名作展:画聖)、広島県立美術館、1971年、「鐵齋の賛文について」(頁の記載なし)。

注8…訓読に関しては神田喜一郎の校閲を得ているという。

る資料を探し出している。拙稿でも小高根の解釈を参考にしつつ、鐵齋の道教関係の賛を取りあげて考察した。ただし、拙稿で取り上げた部分は、賛が頭に浮かんだというよりも、道教関係の書籍の中にある文章を賛で書くことを想定して選び出し、賛の内容にあわせて絵を描いたように思われる。

一、中国の仙境圖

中国には仙山に関する圖が数多くある。ここでは洞窟が描かれている洞天福地に関わるものについて紹介する。

注9…許文美主編『何處是蓬萊：仙山圖特展 = Whereto paradise : picturing mountains of immortality in Chinese art』國立故宮博物院、2018年、13。

圖03 傳五代董源 洞天山洞⁹

圖04 同拡大

この絵は無款であるが、上部に明の王鐸（1592～1652）の賛があり、そこで「董源（生卒年不明）」の作とされている。雲と山が交わる場所に大小



圖03、圖04

の洞口がみえるとされる。「洞天山堂」の四文字は、誰が書いたものかわからないが、適切な名称だとされている。王耀庭は、茅山の三景法師、劉混康の故事と関連すると述べている^{*10}。

圖 05、06 明 陸治 仙山玉洞 縦 150cm 横 80cm

款識に陸治（1496～1576）自題の「玉洞千年秘、谿 罨画^{*11}に通じ來たる。玄中 窟宅を藏し、雲裏 樓臺を擁す。巖竇 天光の下、瑤林 地府開く。瀛海外を須たず。只尺 [咫尺] に蓬萊を見る」が記され、「張公洞に作る。包山陸治」とみえる^{*12}。絵では、大きく開いた洞窟の入り口が描かれ、その前で二人の人物が語りあっている。

張公洞は江蘇宜興縣の南にあり、漢の張道陵の傳説にもとづいている。『雲笈七籤』所収の『天地宮府圖』福地七十二に「第五十九、張公洞。在常州宜興縣。真人康桑治之」としてみえる。明、李賢等撰『大明一統志』卷十にも「張公洞」のことが記されている。

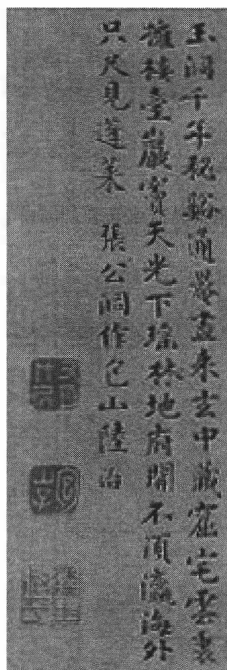


圖 05、圖 06

注 10…前掲『何處是蓬萊：仙山圖特展』165 頁。なお、この絵が華陽洞天茅山を描いたもので、華陽洞天を描いた一連の山水画があることについては、陶金「茅山宗教空間の秩序・歴史的発展のコンテクストの探求と再建」『洞天福地研究』第 4 号、2013 年を参照。

注 11…明、楊慎『丹鉛摘錄』卷十二に「畫家有罨畫、雜彩色畫也」とみえる。

注 12…玉洞千年秘、谿通罨畫來；玄中藏窟宅、雲裡擁樓臺。巖竇天光下、瑤林地府開；不須瀛海外、只尺見蓬萊。張公洞作。包山陸治。

張公洞の現地調査は酒井規史「第五十九福地「張公洞」と周辺地域の宗教関連遺跡の現況」『洞天福地研究』第 8 号、2018 年。



圖 07、圖 08

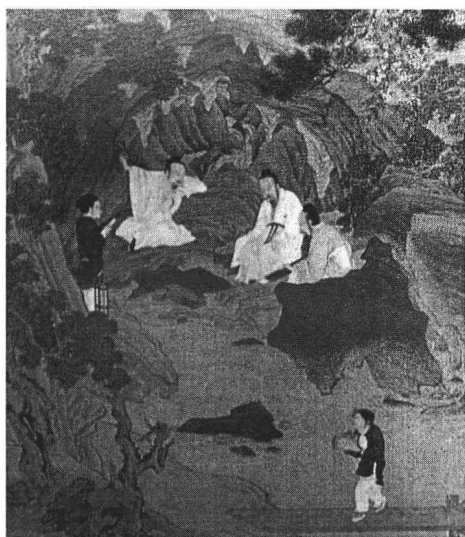
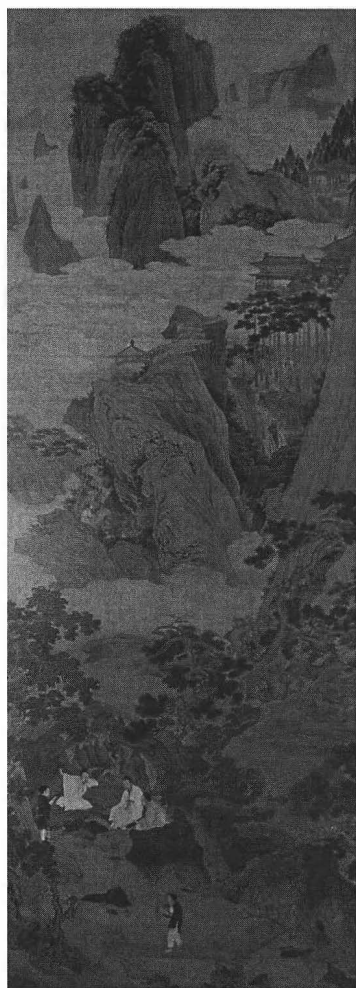


圖 09、圖 10

圖 07、08 明、張宏 林屋洞 縦 30.2cm 横 31.8cm *13

『包山十景』冊の一幅。林屋洞は『天地宮府圖』十大洞天之第九洞天である。江蘇省蘇州にある。洞窟の内部はかなり広いが、ここでは外からみた多くの洞穴が描かれている。手前に小さく描かれた二人の人物がいる。「林屋洞」の文字は張宏の自筆である。

圖 09、10 仇英 桃園仙境圖 *14

桃園とあるので、『三国志演義』の劉備・關羽・張飛の桃園結義（桃園の誓い）をあらわしているのだろう。それが、洞窟の中で行なわれているように描かれている。

圖 11、12 明、仇英 玉堂仙源圖

仇英の「玉洞仙源圖」は、東晋、陶淵明（365 -427）の「桃花源記」の影響はあるが、洞天福地のイメージも看取されるという *15。同じく仇英の「桃園仙境圖」と構圖もよく似ている。前景に橋があり、そのすぐ後ろに洞窟があ

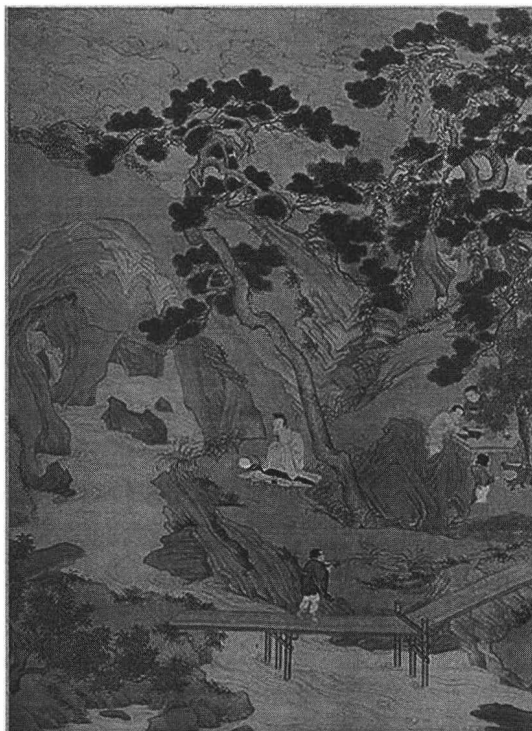


圖 11、圖 12

注 13…前掲『何處是蓬萊：仙山圖特展』。

注 14…『明四家画集：沈周・文徵明・唐寅・仇英』天津人民美術出版社、1993 年、242 桃園仙境圖。

注 15… <http://www.chinanews.se/index.php/content/index/pid/51/cid/1086.html> 2017-11-17 04:30:59 来源：陶金。陶金氏が「中美元首茶叙背后的那幅古画：洞天福地与道教艺术」と題し、トランプと習近平の会談の際に、仇英のこの圖が掲げられていたことを紹介する。全文は長いため、その冒頭部分のみを紹介する。「明 仇英《玉洞仙源图》及局部 故宫博物院藏。按照传统的看法，仇英的这幅代表作反映流传千古的胜境“桃花源”隐逸主题：一位隐士在松下临溪而坐，身前是一处溶洞，童子们不远处忙着摆果奉茶，远处白云缭绕于青山之间。但如果我们稍加留意仇英的其他作品，我们会注意到这些状若灵芝的祥云以及青绿的山水，往往暗示着一处彼世的仙境；尤其是仇英所钟爱的“溶洞”图像，也并非世俗意义的一处岩窟，而是承继了道家神学思想的“洞天福地”。陶金的解释によれば、これは陶淵明の「桃花源記」の影響を受けているものの、仇英が「溶洞」の圖像を酷愛していたことがわかる、という。

る。「玉堂仙源圖」の方は、洞窟から川が流れ出しているため、人は川岸におり、弾琴している。「桃園仙境圖」の方は、洞窟の中に三名の人物がくつろいでいる様子が記される。また後方の山の形もよく似ている。

二、雪舟の山水長巻

雪舟の山水長巻は、縦 39.7 × 横 1592.0 cm の大作である。「冒頭は、山道を上る高士の姿である。その後ろに天秤棒に大きな荷物を担った童子が続く。この高士と童子の姿は、室町時代の山水画にはよく見られるもの。誰かを訪ねる圖像である。室町時代の人々は画卷をひらいた途端に『この先に建物があるな』と予想できたはずだ。そして、このような世俗を離れた高士の姿は、室町時代の禅僧や武家など知識人と呼びうる人々にとって、みずからの理想を投げかけるものだった」と¹⁶、この山水長巻の主人公として、高士が設定されている。この高士は雪舟自身とみてもよく、また絵を見る者とみてもよいだろう。童子については「この場合は、召使いの少年。童形で貴人などに使える者」¹⁷とされている。

注 16…島尾新『雪舟の「山水長巻」：風景絵巻の世界で遊ぼう』小学館 2001 年、14 頁。

注 17…同 15 頁。

注 18…前掲『明四家画集：沈周・文徵明・唐寅・仇英』127。

図 13、14 雪舟 山水長巻 部分

上の二つの圖は、いずれも「山水長巻」にみえる高士と従者の童子の圖である。高士は大きく童子は小さく描かれている。

図 15 雪舟 山水長巻 部分

山水長巻の中ほどに洞窟があり、その中に座り込んで向き合う二人の人物が描かれている。「洞窟のなかへ上ってゆく階段に座り込む二人の人物が見える。二人は向かい合って語り合う風情。俗世間から隔絶された岩山のなかでの清談である。この洞窟のなかの人物というのも、夏珪風の山水圖巻にみられる典型的な圖様」¹⁸とされている。ここでは洞窟に触れる。しかし、洞窟が何をあらわしているのか、といったことに関しては何の説明もない。

島尾新の「訪友」の喩えだと、高士は童子を連れて、友人を尋ねて出発し、その友人の家ではなく、洞窟の入り口で会ったということになる。洞窟の後方につながる道に、洞窟を通り抜ける以外の岐路は描かれていないので、この洞窟はトンネルであろう。ただし、そこに座り込んで向き合っている人物を見ると清談というよりも、むしろ洞天福地のイメージを感じさせる。

島尾は別の書籍でも、この場面を取り上げる。そこでは「岩のダイナミズム」と題して、「洞窟のなかで語り合うふたりの高士、そのまわりを岩が右回りに



圖 13、圖 14

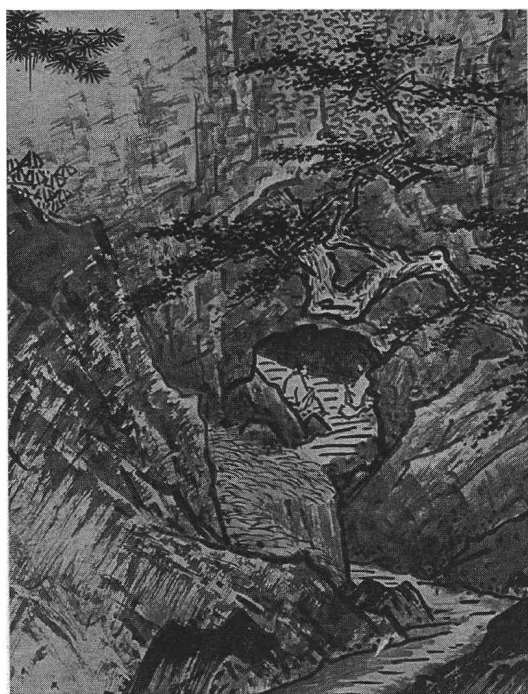


圖 15

渦を巻く。そして右へ出る岩の迫力、力動感にあふれたハイライトのひとつだ」と述べている^{*19}。ここでは岩の描き方については深く考察されているが、やはり洞窟自体に関しては何のコメントもない。

洞窟のイメージとして真っ先に思い浮かぶのは、陶淵明の「桃花源記」である。仇英の「桃源問津圖」^{*20}には洞窟に歩み入ろうとする人物の背が描かれている。しかし、人物はそこでくつろぐわけではない。

注 19…島尾新『もっと知りたい雪舟：生涯と作品』東京美術、2012 年。

注 20…前掲『明四家画集：沈周・文徵明・唐寅・仇英』127。



圖 16

圖 16 仇英 桃源問津圖 部分

注 21…『鐵齋研究』第 56 号、鐵齋研究所、五 仙風道骨圖卷、1981 年。

注 22…「贈寫真何充秀才」『東坡詩集註』卷二十七、宋、王十朋撰、書畫。

注 23…贈寫真何充秀才
君不見潞州別駕眼如電、左手挂弓橫撚箭、又不見雪中騎驢孟浩然、皺眉吟詩肩聳山。

注 24…饑寒富貴兩安在、空有遺像留人間。此身常擬同外物、浮雲變化無蹤跡、問君何苦寫我真。君言好之聊自適。黃冠野服山家容、意欲置我山岩中。數名將相今何限、往寫憂公與鄂公。

三、鐵齋の神仙関連の圖

鐵齋には神仙関連の圖が多数ある。ここではその中で拙稿の内容に関連するものをいくつか紹介したい。

図 17

○仙風道骨圖卷^{*21} 44 歳

紙本淡彩 卷子 20.2×263.8 明治 12 年（1879）

遺像留人間^{*22}。摘東坡句。

「遺像留人間」は蘇軾の詩の一節であり、同詩には「意欲置我山岩中」という句がある。以下、その詩を掲げる。

眞を寫し何充秀才に贈る 君見ずや潞州の別駕、眼電の如し、左手に弓を掛け横ざまに箭を撚り、又た見ずや雪中の驢に騎る孟浩然、眉を皺め詩を吟じ肩、山を聳やかす^{*23}。饑寒富貴、兩つながら安くにか在るや、空しく遺像を人間に留むる有り。此の身、常に擬して外物に同じうす、浮雲變化し蹤跡無し、君に問う「何ぞ苦だ我が眞を寫さん」と。君言う「之を好み聊か自ら適しむ」と。黄冠野服す山家の容、意、我を山岩中に置かんと

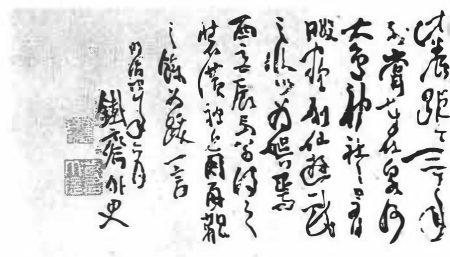


図 17

欲す。勲名將相、今何をか限まん、往きて寫す褒公と鄂公とを²⁴。

『東坡詩集註』には、「意欲置我山岩中」のあとに、「次公、顧愷之、謝鯤の像を為るに石岩裏に在らしむと云う、此の子、宜しく丘壑中に置くべし。鯤自ら謂えらく『一丘一壑、庾亮に過ぎたり』と」²⁵ という注釈がつけられている。これは顧愷之が謝鯤を石岩の中に描き、「此の子、宜しく丘壑中に置かしむべし」と述べた話と結びつけている。この注釈は、『世説新語』巧藝第二十一の「顧長康、謝幼輿を畫き、巖石の裏に在らしむ。人、其の所以を問う。顧曰く、『謝云う、『一丘一壑、自ら謂えらく之に過ぐ』と。此の子、宜しく丘壑中に置くべし』と」²⁶ にもとづいている。

「遺像留人間」という題字は、蘇軾の詩を通して顧愷之の「巖石裏」「丘壑中」にまでつながっている。蘇軾の詩の「寫眞（眞を寫す）」という言葉は、人物

注 25…次公顧愷之為謝鯤像在石岩裏云、此子宜置丘壑中、鯤自謂一丘一壑過於庾亮。

注 26…顧長康、畫謝幼輿、在巖石裏。人間其所以。顧曰、謝云、一丘一壑自謂過之。此子宜置丘壑中。

注 27…明、樂韶鳳等撰『洪武正韻』卷三、「眞」に「神也」とみえる。白川静『字通』は「たましい」という訓をつける。

注 28…畫繪之工亦為妙矣。自古名士多或能之。……武烈太子偏^{ひと}えに能く眞を寫す、坐上の賓客、隨宜點染即成數人。以問童孺、皆知姓名矣。

注 29…昔、巢居士。事東海青童君。苦心屈節奉師。溽暑^{じよくしよ}沍寒^{ごかん}（無懈）無怠。（僅）二十年。乃口授八方。使八節制服。以應八卦。若人未能跨鶴騰霄。優游于乾坤之内。守顯然之炁。容色不改。壽滿百年。須服此藥。神仙秘妙。不可輕泄。能久服必登（上）仙。右見雲笈七籤。

注 30…『鐵齋研究』56にその指摘がある。ちなみに、『雲笈七籤』の文は、「太上肘後玉經方八篇 霞棲子盧道元 昔巢居士奉祀東海青童君。節苦心寂奉師。禮具暑雨祁寒無懈無怠。僅二十年乃口授八法。手錄聖方曰、若求跨鶴昇九霄。未易致也。若優遊乾坤之内。守顯然之氣。容色不改。心目清朗。壽數百年。不歸可得矣。然神仙秘術、不可傳非其人。長安年中、巢居士以寒棲子賢人也。使沐浴齋戒、乃授其事。至貞元八年、寒棲子以余不揆陋微游放自適所從來者匪世俗之士無聲利之交、若天與之正性乃傳之。余以・棲子文華之士、昔登上科忽遺馳驚息心道門、僅六七年。其・法秘術無不得

の像を寫す際に、たんに外形を寫すのではなく、その眞^{たましい}を寫すのであろう。なお『顏氏家訓』雜芸に「畫繪の工も亦た妙を為す。古自り名士多く或いは之を能くす。……武烈太子偏^{ひと}えに能く眞を寫し、坐上の賓客、宜に隨いて點染し、即ち數人を成す。以て童孺に問うに、皆な姓名を知る」^{*28}に「寫眞」の典拠がみえる。

圖を見ると、人物の右から上にかけて岩が描かれている。直接ではないものの洞天福地の洞窟に繋がるように思われる。

本圖には賛が七つつけられている。ここでは洞天福地と関連するものだけをとりあげた。

昔、巢居士、東海青童君に事え、苦心屈節、師を奉ず。溽暑^{じよくしよ}沍寒^{ごかん}こと無く、二十年、乃ち八方に口授し、八節をして制服し、以て八卦に應ぜしむ。若し人をして未だ能く鶴に跨り霄に騰り、乾坤の内に優游し、顯然の炁を守り、容色改めず、壽、百年に滿たざらしむれば、須べからく此の藥を服すべし。神仙秘妙にして、輕^{かる}がろしく^{もら}泄す可からず、能く久しく服すれば必ず仙に登らん。右、雲笈七籤に見ゆ^{*29}。

とある。

「右、『雲笈七籤』に見ゆ」と『雲笈七籤』の文のように記されている。しかし、実際には、明、『遵生八牋』卷三、太上肘後玉經八方に、冒頭、「雲笈七籤曰」として、この文を載せている。『雲笈七籤』卷之七十四・方藥・太上肘後玉經方八篇の文は、かなり長く相違がある^{*30}。

東海青童君については、

第二委羽山洞 周廻萬里、號して「大有空明の天」と曰う。臺州黃巖縣に在り、縣を去ること三十里、青童君之を治む^{*31}

とみえる。

委羽山は我々、洞天福地研究会が調査した場所であり、大形による報告もある^{*32}。東海青童君については『眞靈位業圖』に、「九微太眞玉保王金闕上相大司命高晨師東海青華小童君」とみえる。その省略形が東海青童君になる。方諸青童君、上相青童君などとも呼ばれる。神塚淑子「方諸青童君をめぐる」に詳しいので、それを借りて紹介すると、

華陽洞天之支配者は定録君（中茅君）と保命君（小茅君）であるが、この二君は司命君（大茅君）に隸属し、司命君は、上に見たように、方諸青童君の統率のもとにある。したがって、方諸青童君は司命君の要請を受けて、

定期的に華陽洞天を訪れ、地仙たちの修行の様子を視察するとされている。このような方諸青童君と洞天との結びつきは華陽洞天の場合だけのことではない。茅山に方諸青童君の乗った車の車輪の迹が残っていることを述べ、「諸有洞天は皆爾り、但に句曲のみにあらず」（『真誥』卷一一）と言っている言葉が示唆するように、すべての洞天がそれぞれに東海の方諸青童君と直接につながりを持ち、その支配下に置かれていると考えられているのである^{*33}。

つまり、方諸青童君は華陽洞天とつながっていることがわかる。また「すべての洞天がそれぞれ東海の方諸青童君と直接のつながりを持ち、その支配下に置かれている」とあるように、東海青童君は洞天を論ずる場合に不可欠の神仙であったとわかる。

句曲については、前掲、神塚論文の注 37 に、

洞天の観念と洪水神話との関連を見る上で、地肺山（浮山とも呼ばれる）というものが注目される。『真誥』卷一一に茅山のことを「句曲の地肺」と表現し、その注に「水至れば則ち浮く、故に地肺と曰う」という。『高士傳』・『神仙傳』・『抱朴子』などにも地肺山という語が見え、隠者や仙人の住む所とされている。また、『遊名山志』（『藝文類聚』卷七所引）には「玉溜山、一名地肺山、一名浮山」とあり、洞天を持つ山（地肺山）と洪水の時に水に浮かぶ山〈浮山〉とを同じものと見なす観念があったことがわかる^{*34}。

とされている。これは、十大洞天の第八に、

第八句曲山、洞周廻一百五十里、名づけて金壇華陽の洞天と曰う。潤州句容縣の屬に在り、紫陽真人之を治む^{*35}。

とみえる。ここには紫陽真人のことが記されているが、「華陽」は陶弘景の住んだ場所であり、その号は「華陽隱居」である。

この賛をみるだけで、鐵齋は道教や洞天福地に対して深く理解していたとわかるのである。

之、而至理之要、曾似未遇、顧余有此遺禮留愛、久之而言、余知其志士也。心忘爵祿、遯時稱騷雅之。什有而若無實而若虛者哉。必當羽化雲飛。豈止・鶴齋壽寶歷乙雲氣融資地仙」と、かなりの長文である。後半部分は、この賛と、ほとんど関わらない。『遵生八牋』は『雲笈七籤』の文を節録したもので、鐵齋はそこから賛の文を寫している。

注 31…第二委羽山洞 周廻萬里號曰、大有空明之天、在臺州黃巖縣、去縣三十里、青童君治之。

注 32…拙稿「洞天における山と洞穴—委羽山を例として」『洞天福地研究』1 号、好文出版、2012 年、同「第二洞天委羽山探訪記」。

注 33…神塚淑子「方諸青童君をめぐる」『東方宗教』76、日本道教学会、1990 年。

注 34…前掲、神塚淑子「方諸青童君をめぐる」22 頁。

注 35…第八句曲山、洞周廻一百五十里、名曰金壇華陽之洞天、在潤州句容縣屬、紫陽真人治之。



圖 18



圖 19

図 18

○仙境高會圖^{*36} 81歳 139.5 × 42.2

「仙境高會圖」は鐵齋 81 歳の時の作である。山から小川が流れ小さな橋を越えたところに洞窟の入り口がある。洞窟の奥には鹿が横向きに描かれる。鹿の頭部は見えない。鬚をたくわえ、杖をつき、ゆったりとした衣服を着た老人は、迎えにきた仙人で、その横の白い服を着た男性は尋ねてきた高士なのだろう。老人と話をしているため、こちらに背を向けている。後ろには荷物を棒にゆわえて肩にかついだ従者がいるが、老人の方は向かず、右側の洞窟の壁を所在さげに見ている。

山の中腹には、楼閣が連なり、山の上方にも二階建ての小さな建物が見える。賛の「煙霞問訊し、風月相知る」は『全唐詩』巻五、上官昭容の「遊長寧公主流杯池二十五首」の「仰循茅宇、俯眄喬枝、煙霞問訊、風月相知」の下二句

注 36…『鐵齋研究』第 65 号、15

である。賛には記されていないが、「仰ぎては茅宇^{めぐ}を循り、俯しては喬枝^{なが}を眇む」もこの一幅をあらわす句として、まさにぴったりである。おそらく、鐵齋は下の句を記して、上の部分を想起させようとしているのだろう。

箱書きには、

胸中、一粒の靈丹一粒有りて、方^{まさ}に能く俗累を脱化す。便ち是れ僊居なり

*37。

大正五年三月。九九八十一清煩惱主(人) 鐵齋自題簽。(白文「鐵齋居士」)

注 37… 胸中有靈丹一粒。方能脱化俗累。便是僊居。

これを見れば、賛だけではなく、箱書きの部分も鐵齋を知るための有力な手がかりとなることがわかる。

いずれにしても、この画に洞窟が描かれているのは、その先の世俗を超越した僊居に至る道筋ということになる。

圖 19

○羣僊高會圖^{*38} 83 歳

絹本着色 掛幅 共箱 175.4 × 71.5 cm

大正七年(1918) 83 歳

注 38… 『鐵齋研究』第 56 号、21

「羣僊高會圖」は鐵齋 83 歳の時の作である。もとめに応じて皇室に献上されたものである。

羣僊高會

甲子の春三月八日。洞賓、海上の諸仙と復た山島の舍に叙す。天(朗)氣清、恵(風)和暢せり。座には雲母の屏を開き、爐には金猊の篆を爇く。蔬果^た交^こども羅^{つら}ね、馨香^こ畢^とく薦^とむ。洞賓之を悦ぶ。是に於て諸僊と海螺の盃を舉げ、洪梁の醢を酌み、白苧の詞を歌い、黄梁の曲を賦す。觥籌相い錯わり、廣和競い逐う。洞簫を吹き、漁鼓を撃ち、檀板を敲き、箏箏を舞わしむ。綵袖^{ひるがえ}翩^{ひるがえ}りて雲翻り、羽扇揮いて月舞い。玉山未だ頽れず。氷壺^つ竭きず、瓊府丹宮、瑤臺玉闕と雖も、亦た何ぞ今宵の宴に異ならんや。既にして夕陽西に墜ち、新月半ば吐く。楚岫、雲低^たれ、晚江、煙鎖す。而して羣僊、此に至りて興復た淺からず、高く銀燭を乗り、再び歌い再び詠じ、千載の奇逢を慶び、人間の樂事を叙^のぶ。勝會常に非ず。佳期再びし難し。鍾離老師自り、以て列班の僊友に至るまで、無不歡欣交^のども暢びざるは無きなり。且つ吾^{ともがら}が僊、長生の術を蓬萊に得、飛僊の跡を海島に寄す。麋鹿^{すなわ}と而ち相い遊び、風月に對し、以て侶と為す。洞口の丹芝を採り、松間の白石を煮る。毛を抜き髓を洗い。導飲服食し、名山異島、遍く及ばざる無し。天上人間、

注 39…夙分、宿命。

注 40…羣僊高會圖 甲子之春三月八日、洞賓與海上諸仙、復叙于山島之舍。天（朗）氣清、惠（風）和暢、座開雲母之屏、爐熱金猊之篆、蔬果交羅、馨香畢薦、洞賓悅之。於是與諸僊舉海螺之盃、酌洪梁之醕、歌白苧之詞、賦黃梁之曲、觥籌相錯、廣和競逐、吹洞簫、擊漁鼓、敲檀板、舞箏簫、採袖翻而雲翻、羽扇揮而月舞。玉山未頽、冰壺不竭、雖瓊府丹宮、瑤臺玉闕、亦何異于今宵之宴也。既而夕陽西墜、新月半吐、楚岫雲低、晚江煙鎖、而羣僊至此興復不淺。高秉銀燭、再歌再詠、慶千載之奇逢、叙人間之樂事、勝會非常、佳期難再。自鍾離老師、以至列班僊友、無不歡欣交暢也。且吾僊、得長生之術於蓬萊、寄飛僊之跡於海島、與麋鹿而相遊、對風月以為侶。採洞口之丹芝、煮松間之白石、拔毛洗髓、導飲服食、名山異島、無不遍及。天上人間、頃刻而集、或秦漢之英豪、或風塵之逸客、道骨僊風、清姿芳格、固不知有人間之樂也。而今皆名標丹籙、（位）列飛僊、豈偶然哉。今吾與諸仙相遇於仁壽之室、蓋亦夙分。時夜方半、萬籟無聲、間有白鶴飛鳴于九臯之表、翱翔於雲漢之間、四顧而下、端集庭堦。余熟視之、思欲歸洞。群僊亦相推而起。于是聯列洞、乘羽輪、指歸塗而共適、泝杳靄于祥雲。余廼為賦之以記其事。呂洞賓撰。大正七歲歲在戊午二月。八十又三齡。鐵齋外史畫併錄。

頃刻にして集まる。或いは秦漢の英豪。或いは風塵の逸客、道骨僊風、清姿芳格、固より人間の楽しみ有るを知らざるなり。而るに今、皆な名、丹籙に標し、（位）飛僊に列するは、豈に偶然ならんや。今、吾れ諸仙と仁壽の室に相い遇す。蓋し亦た夙分なり^{*39}、時に夜方に半ば、萬籟、聲無し。白鶴飛びて九臯の表に鳴く有るを聞き、雲漢の間に翱翔し、四顧して下り、庭堦に端集す。余れ之を熟視し、思い、洞に歸らんと欲す。群僊も亦た相い推して起つ。是に^{おい}于て洞に聯列し、羽輪に乗り、歸塗を指して共に適く。杳靄を祥雲^{のぼ}に泝る。余れ廼ち為に之を賦して以て其の事を記す。呂洞賓撰。大正七歲歲在戊午二月に在り。八十又三齡^{*40}

鐵齋外史畫併せて録す^{*41}。

手前に洞窟が見える。「是に于て洞に聯列し、羽輪に乗り、歸塗を指して共に適く」と、中に入ろうとするのではなく、そこから出てくる仙人の姿が描かれている。「長生の術を蓬萊に得、飛僊の跡を海島に寄す」とあり、蓬萊山を含む三神山と関わりのあることが記されている。「麋鹿と而ち相い遊び」とあるが、鐵齋の他の圖では、洞窟に麋鹿を描くものがいくつかある。「洞口の丹芝」も他の圖に描かれる。鐵齋の畫は、いくつかを総合して見る必要があるだろう。「洞に歸らんと欲す」とあるため、歸る場所もまた「洞」である。「群僊も亦た相い推して起つ」と、このあと洞から続々と出てくるのであろう。明らかに贊の内容にもとづいて、この一幅が描かれていることがわかる。鐵齋が「まず贊を読め」と言ったのは、このように贊から発想された絵を意識してのことであろう。なお、賦の作者とされる呂洞賓は八仙の一人とされる人物で^{*42}、賦にみえる鍾離老師も八仙の一人、鍾離権のことであろう。八仙の由来に関しては複雑であるが、現在、中国でもっともよく知られている仙人たちである。

圖 20

○餐水喫霞圖 85 歳

餐水喫霞圖の最下方、右側に「洞窟の入り口」が描かれ、そこに二人の人物が対面している。右側の人物は立っており、頭はまるめて杖をつき、袈裟を着た僧形である。口髭があり、体格がよく太っている。左側の人物は座っており、やはり頭をまるめている。杖は身体の前に斜めに抱え込んでいる。やはり、袈裟を着て僧形である。顔は面長、中肉中背で髭はなく、右の僧よりも若くみえる。二人は会話をしているようにみえる。「洞窟の入り口」に見えるのだが、じつは後方につづくのは草ぶきの屋根をもち窓のある壁をもつ橋である^{*43}。その窓からは別の人物の姿もみえる。



圖 20

洞窟にしても橋にしても、その先に別世界があることを暗示させるものである。

雪舟の山水長巻にもよく似た構圖がある。ただし、雪舟は僧であるため、画題として描かれるものは仏教であり、道士は描かれていない。

注 41…唐の仙人呂洞賓の「群仙高會賦」は『道藏輯要』第十二冊「呂帝文集」に載っているが、鐵齋がここに用いた本と少異あり。同書を参考して脱字を補っておく、とされる。拙稿では、さらに拓本等を参考にした。

注 42…拙稿「中国人と道教一『東遊記』の八仙をめぐる一」、中村璋八編『中国人と道教』汲古書院、1998 年 11 月、所収。

注 43…ニーダムは屋根のある橋を紹介している。



圖 21、圖 22

圖 21、22

注 44…群僊祝壽、余造此圖、頗覺有仙氣也。八十又六叟 鐵齋

○群僊祝壽圖 86 歳

注 45…「余常讀僊書雲笈七籤。遂造此圖。聊以賀自家之長壽也。大正十年八月甲子日。八十又六翁鐵齋」『鐵齋研究』第 12 号、鐵齋研究所、20 群僊祝壽圖。

賛には、「群僊祝壽、余れ此の圖を造り、頗る仙氣有る覺ゆるなり。八十又六叟 鐵齋」⁴⁴とあり、箱書に「余れ常に僊書雲笈七籤を讀み、遂に此の圖を造る。聊か以て自家の長壽を賀うなり。大正十年八月甲子の日。八十又六翁鐵齋」とみえる⁴⁵。八十六歳の鐵齋は常に『雲笈七籤』を読んでいると自ら述べている。先にみたように「洞天福地」の語は『雲笈七籤』にみえる語である。「頗る仙氣有るを覺ゆるなり」と、たんなる知識ではなく、それを体得し

ていたかのように記している。

四、鐵齋に対する評価

「群僊集會圖」を収録する『富岡鐵齋没後90年 鐵齋—仙境への道—』の紹介文には、

89歳の長寿を全うした富岡鐵齋（1836-1924）は、生涯、俗世に染まることを厭い、中国の神仙思想や老子、莊子に親しみ、文人の理想とする世界を求めました。晩年には長寿を何よりの幸せと感謝し、自らを今の世の寿老人にたとえました。不老不死の仙人が住むという理想境に思いを馳せ、萬巻の書を読破して得た該博な知識をもとに多くの仙境圖を描きました。人々は鐵齋の長寿にあやかりたいとそれらを求め、数多の傑作が遺されました。

鐵齋没後90年にあたり、本展では初期の大作《高士隱栖圖・松雲僊境圖》、自身の姿を寫した《寿老人像》や、鮮やかな彩色の《群僊集會圖》や最晩年の幸福感に満ちた美しい《扶桑神境圖》など仙境圖の数々を御覧いただきます^{*46}。

とみえる。

没後、90年をへて、あらためて鐵齋の神仙道教関係の書画が注目されているのである。そして、この書の表紙が「群僊集會圖」である。

井上靖は、中央公論社の『富岡鐵齋』のなかで、「鐵齋の仙境」という文章を書いている^{*47}。

《瀛洲僊境圖》は亡くなる三日前の作品で屹立した巨大な岩山の麓に、桃であろうか、今を盛りと咲き誇っている赤い花に取り囲まれた幾棟かの民家が描かれている。瀛洲というのは神仙の住む島であるが、そうしたもののしい感じはなく、春先きののどかな農村風景とでも言いたいようなものである。華やかで、しかも端麗、鐵齋が最後に行きついた心境は、このようにおだやかで、明るく、華やいだものであったのであろうか。赤い花の点描は、まるで作者の生命が飛んででもいるかのようである。《梅華書屋圖》と共に鐵齋の傑作中の傑作としていいものであろうと思う。

鐵齋は死を前にして、《溪居讀書圖》、《水墨清趣圖》、《梅華書屋圖》、《瀛洲僊境圖》の、それぞれのおだやかな理想郷に遊んだのである。ここにはもう石の臺の上に仙境を置いたその少し前の烈しく、きびしい鐵齋は居ない。それからまたその前の、長い生涯に於て夢み続けた異国の仙境も、そ

注 46…[https://www.museum.or.jp/modules/im_event/?controller=event_dtl&input\[id\]=82260](https://www.museum.or.jp/modules/im_event/?controller=event_dtl&input[id]=82260)。富岡鐵齋没後90年 鐵齋—仙境への道—

注 47…小高根太郎編集『富岡鐵齋』（日本の名画、井上靖、河北倫明、高階秀爾編集、3）中央公論社、1975年。

ここに遊び続けて来た鐵齋も居ない。

こんどは実物の前に立つことはできなかったが、同じこの最後の年に、鐵齋は《山輝水媚圖》、《勝景掌覽圖》、《鍾馗降福圖》といったものを描いている。色刷りで見ると、いずれも日本的仙境画となっており、やはりのびのびと、明るく、華やいだものが画面から窺える。おそらく実際にその作品の前に立っても、そこから受けるものは同じものである筈であるし、同じものであると思う。機会があったら、それを確かめてみたいものである^{*48}。

注 48…前掲『富岡鐵齋』
99頁。

と述べている。

井上の感覚では鐵齋の最晩年のものは日本的仙境画であるという。「瀛洲僊境圖」の「瀛洲」は、『史記』封禅書等の蓬萊・方丈・瀛洲にもとづくものである。しかし、後世、それらは日本をあらわす、とみなされた。江戸時代には「瀛洲」が変化した「東瀛」が日本をさすようになった。三神山は中国に由来するものの、いつのまにか日本をあらわすようになった。日本的であることは、むしろ、当然なのかもしれない。

本田成之（1882～1945）は『富岡鐵齋と南畫』で、洋画家、正宗得三郎の評を載せている。

現世で、日本人ばかりでなく歐洲の畫家にも会ったけれども富岡先生くらゐ特殊な印象を私が受けた人はない。殊に最晩年の先生に接する時は現世と未来とに跨つてゐる様な仙人と対坐してゐるやうな感じがした。仙人と云つても、ひからびた意味の仙人でなく輝きと永遠性とをもち、まるで桃源に住んでゐる仙人の様な気持であつた。そして先生の話される一言一句が不思議な神韻を帶び、また筆談中に筆墨が紙に觸れると、そのものが藝術品と化するやうに思はれた。

先生はよく仙人のことを話され、何時か私に……「仙人今猶在人間」と云ふ文字を書き、それと共に孫思邈と思はれる仙人が病床の人に藥を運ぶ圖を極粗畫で描かれたことがある^{*49}。

この話から鐵齋が日頃、仙人のことを口に、「仙人今猶在人間（仙人今猶お人間に在り）」、つまり、仙人はいまでも世間に存在する、と述べ、またその書画を描いたことがわかる。また鐵齋自身のことを「……仙人と対坐してゐるやうな感じがした」と述べている。孫思邈（541～682）は藥王と呼ばれ、医学にも道教にも通じていた。鐵齋には「孫思邈医僊象」^{*50}「孫真人山居圖」^{*51}がある。

注 49…湯川弘文社、1943年。本田成之は『支那經学史論』（弘文堂書店、1940年）を著した学者であり、富岡鐵齋に師事して自身も文人畫を描いている。

注 50…『鐵齋研究』第 42号、28。

注 51…同、第 1 号、29。

五、その他の鐵齋の圖

詳しく、とりあげられなかった鐵齋のその他の圖について、簡単に記す。

○五嶽眞行圖（紙本墨畫 額装 29.0 × 98.3 40 歳代）^{*52} ○扶桑僊境圖（絹本着色 扇面額装 18.7 × 55.1 大正六年（1917）82 歳）^{*53} は扇面だが、画面の中央に洞窟があり、鹿が顔を覗かせている。○東瀛神山圖（絹本着色 掛幅 共箱 132.5 × 42.0 大正九年（1920）85 歳）は^{*54}、下の方に瀧と洞窟が見え、洞窟の中に人の姿がみえる。○東瀛神山圖（絹本着色 掛幅 132.5 × 42.0 大正九年（1920）85 歳）^{*55} は、画面の下に洞窟が二つあり、右には鶴が二羽、頭を後に向け、横向きに描かれ、左には何も無い。○心遊僊境圖（紙本着色 掛幅 131.9 × 33.7 大正十一年（1922）87 歳）^{*56} ○蓬萊僊境圖（紙本着色 掛幅 143.5 × 39.0 大正十三年（1924）89 歳）は^{*57}、画面の下に洞窟が二つあり、右には鹿が顔を覗かせ、左には童子が顔を覗かせている。なお蓬萊僊境圖と題する圖はあわせて十幅ある。○西王母像（紙本着色 掛幅 131.0 × 47.0 大正十二年（1923）88 歳）は^{*58}、西王母と桃を描く。有名な中国の女神であり、のちに道教の中で高い地位をしめる。○寫生帳 九 洞道豊雨は^{*59}、岩に四角い窓が三つ開けられ、その右にも左の窓よりも少し大きい四角い枠があり、奥に建物があるように見えるが判然としない。左と右には人物の姿がみえる。左の窓の人物は傘をかぶり、正面からやや左向きの人物がすわっているように見え、左手に棒状のものをもち、前には茶の道具が置かれているように見える。右の窓の人物は口髭のある顔を右に向けている。これは雪舟の絵の洞窟に似ている。

注 52…同、第 59 号、6。

注 53…同、第 67 号、10。

注 54…同、第 32 号、26。

注 55…同、第 32 号、26。

注 56…同、第 5 号、22。

注 57…同、第 67 号、19。

注 58…同、第 32 号、29。

注 59…本田成之『富岡鐵齋と南画』圖版に紹介。

六、賛をどう読むべきか

小高根太郎は、「鐵齋の賛文について」で以下のように述べている。

昨年文化勲章をもらった棟方志功は、鐵齋を神のように崇拜しているが、まだ無名時代に、おれは将来鐵齋以上の作家になって見せると豪語し、『鐵齋は学問がありすぎた。あんなに学問に打ちこんでいなかったら、彼の絵は、もっと進んでいただろう。』とか、『鐵齋ともあろう人が、あの書は、しゃれすぎている。』などと、小生に語ったことがある。これは作家同志の間によく見かける、よい意味での敵愾心なり競争意識の発露だから、小生は軽く聞き流しておいたのだが、鐵齋ならば負けていないで、「お前は無學じゃな。」と棟方に一喝を喰らわしたかも知れない。

鐵齋は「わしの絵を見るなら、まず賛を読んでくれ。」と、しばしば人に語っているが、彼は絵が出来てから賛を考えたのではなく、まず賛が先

に頭に浮んで、それに相応しい絵を考えたように思われる。今日では漢文学が一般に衰え、最高の文化人の間にも、鐵齋の賛を読める人は少く、賛など読む必要はない、かえって絵の鑑賞の邪魔になるとする考えすら現れている。なるほど賛文の内容は理解できなくとも、書の立派さは十分に分るし、絵の方は書よりも更によく鑑賞できることは事実である。漢字が全く読めず、書に対する理解もない諸外国で、鐵齋があればほど尊敬され愛好されるのも、ひとえに彼の絵の素晴らしさが人々を魅惑するからであろう。だが、これは鐵齋その人にとっては、全く不本意なことだろう。その絵だけ鑑賞して、賛を読まずにすまずのは、鐵齋の精神を棄て去って、形骸だけを追うことである。鐵齋の思想を知らずして、その藝術を云々するなど、全くおこがましいことで、鐵齋を冒瀆するも甚しいと言うべきである

^{*60}。

注 60…『画聖鐵齋名作展』
会場、広島県立美術館、会
期 1971.4/24～5/9 奥付
なし、頁なし。

棟方志功（1903～1975）は日本を代表する藝術家である。しかも鐵齋を神のように尊崇していたという。その彼にして鐵齋の本質を全く理解していないことを、小高根太郎は辛辣に暴露している。「鉄齋は学問がありすぎた。あんなに学問に打ちこんでいなかったら、彼の絵は、もっと進んでいただろう」という言葉は、文人画に対する根本的な無理解を示している。文人の深い教養に裏打ちされた内面世界の発露が文人画であろう。棟方は、そのことを全く考慮していない。学問に打ち込まなければ、彼の絵はもっと進んでいたの「進む」とは、たんに畫の技術のことを述べているだけである。鐵齋の絵は、そのような技術だけでとらえられるものではない。ただし、後世、棟方は無學ではあっても、その信仰によって独自の境地に到達している。

鐵齋は自分の絵を見る時に、まず賛を読めと言っていた。董其昌（1555～1636）の「讀萬卷書、行萬里路」を自身の座右の銘とし、また山本竟山（1863～1934）筆の扁額「不讀五千卷書者、無得入此室（五千卷の書を読まざる者は、この室に入るを得る無かれ）」を富岡家の玄関に掲げていたという^{*61}。萬卷の半分の五千巻でよいというのが面白いが、棟方には門をくぐれなかったであろう。

「その絵だけ鑑賞して、賛を読まずにすまずのは、鐵齋の精神を棄て去って、形骸だけを追うことである。鐵齋の思想を知らずして、その藝術を云々するなどは、全くおこがましいことで、鐵齋を冒瀆するも甚しいと言うべきである」。これは、鐵齋全集で、鐵齋の賛のすべてを訓読し、訳をつけている小高根にしてはじめて発しうる言葉であろう。

賛は漢文で記される。中国的教養を身につけ、少なくとも五千巻の書物を読んではじめて、鐵齋の書画の輪郭がおぼろげながらみえてくる。鐵齋は道教神仙関係の圖を多くあらわしている。先にも見たように「蓬萊僊境圖」と題する

注 61…蘇浩「山本竟山と
富岡鉄斎の交遊について」
『或問』71、No.34、2018
年。

圖はあわせて十幅あり、よく似た題の圖も数多い。それらの圖柄や賛は、それぞれ補いあって、ひとつの思想を形成しているように思われる。一幅の圖を解釈する場合に、他の圖柄や他の賛が手助けになる場合がある。

おわりに

洞天福地などの仙境圖は、広い意味で山水画に含まれる。山水画はその一幅を掛けることによって、室内に居ながらも見る者の心を山や川のある景色の中に遊ばせる事ができる。居ながらにして心は別世界に入り込むのである。「心遊僊境圖」という題は、その山水が仙境であることを端的にあらわしている。

洞天福地に関わる絵は洞窟が示唆的に描かれている。洞窟は、山水画中のさらなる別世界への入口であって出口である。一種の画中画であろう。描かれた景色全体がすでに洞天福地であるのだろう。洞窟で談笑する人物がいる。一方、中に何も描かれていない洞窟の入り口に、その中をのぞき込む鹿がいる。その奥に人を誘うかのようなようである。奥にはさらなる別天地、そこそそが眞の洞天福地であると暗示させているのである。

本文で繰り返し述べたように、鐵齋の圖は、まず賛を読まねばならない。それは鐵齋自身が熱望していたことである。文字文化に裏打ちされた深い教養をベースとする中国的文人世界は、その埒外にいるものに、反感を抱かせる事もあったのだろう。しかし、「漢字が全く読めず、書に対する理解もない諸外国で、鐵齋があれほど尊敬され愛好されるのも、ひとえに彼の絵の素晴しさが人々を魅惑するからであろう」と、その絵は漢字文化圏以外にも受け入れられている。その絵から滲み出るのが感動を与えるのであろう。

けれどもやはり、賛を読み解く事によって、さらに深く理解できる事はいうまでもない。「群僊高會圖」などは賛の内容にそって圖が描かれている。賛の中に呂洞賓や鍾離権など具体的な仙人の名がみえ、それによって我々は八仙の故事をイメージし、圖の内容と重ね合わせることができるのである。箱書きなどによって鐵齋は『雲笈七籤』を愛読していたことが記され、道教に関して深い知識を持っていたことがわかる。「洞天福地 羣僊集會」は、神仙に憧れる鐵齋の画境の一つの到達点を示しているように思われる。